

辻潤

林傳衛氏筆

辻潤

宮嶋資夫氏筆

辻潤

高村光太郎氏筆

あはれ

辻潤

鳥有叢書。第一冊

水島流吉の覚え書き

昭和二十一年十一月十五日印刷  
昭和二十一年十一月二十日発行

編輯・發行 東京都淀橋区  
印刷者 淀橋七一五

木村方 西山雄太郎

水島流吉の覚え書き

辻潤

贈呈

大木靜雄様

終戦者

無風帯社刊

一 一人の意見を書き

つは潤追悼しを自分が出すべく計畫したのは、昨年の十一月であつた。まだ何々ら存することなくして、一々年といふ日月が経過してしまつた。

友人黒田光作君が、雜誌「ダダ」を發行し、この十一月には「辻瀧遺墨展」と「辻瀧左衛門公會」をやつてくゝれる事になつてゐたが、「遺墨展」は「還公會」を中止するのやむなきになリ、さうしてまた「ダダ」を第四號から「詩帖」と改題して、「詩」と隨筆との同人雜誌になつてしまつた。

如近に團圓君の雜誌「ダダ」が、「詩帖」にまでボツラクしやうとせ、自分の「過激」の「黒旗」は捲きはしなげ。むかしから自分は、徒党をくむ事がキライな人間だ。自由気儘である事がスキなのである。だから「無團圓社」といふのは、結局でも團體でなく、自分ひとりの一枚看板なのである。無習であり無能であり、他人である自分が、たった一人でのそのそやつてゐるのだからして、自由のは事なきはゆるく道理はさ

の間合せの便りを貰ったのだった。それで、  
はじめてつと潤の死を、自分は知ったのだ  
あった。

五月廿五日の空襲で、自分は一切の「所有財産」を失ひ、しつまつた。その中には、貴重なる「辻潤」、「高村光太郎」、「無政府主義」等に関する「文獻」が有つたのである。しかしあの頃の自分は、自ら死ぬる事に心を決めてゐたので、それらのものに対しては何等の魅力も執着もなく、唯單に「死ぬる」にこそ心をうつはれてゐたのであつた。惜しいが、昭和十五年二月に「マダムオリエンタル」へ本通り夜はふけて「織線博」の酒ほがみマダム、ステキな酔拂入、酔つてクダ巻くうるささよ、御機嫌ニハ百年、と「辻潤」が表現したところの「は、高村さん」が、よく好きで、高村さんとは「天國の先生」で、僕は「地獄の先生」だと云つてゐる。君の文章が、僕にたいへん似てゐると云つて、とにかくよるこんでゐたといふ。辻潤氏の手紙の一節を思ふに、たゞたのである。今は「地獄の先生」が「天國」へ移住してしまふ、「天國の先生」が「地獄」へ移住してしまふ、太田村山口山のあるべき高村光太郎氏は、太田村山口山の山蔭に、婢をくらゐて蟬彫るわかれは——遠く岩手に居住されて、「浮世の風」したふきつけられて居らぬのである。「辻潤」と「高村光太郎」——この兩人こそ、自分の心の中さ

のである。だが、自分は一切を無視して、  
一週間は停職の仕事を通じて休んでおくだらう。そ  
れでいいと自分は信じてゐるのである。  
晩年の辻潤氏は、すべてのものから「無視」  
されてゐた。しかるに、昭和十九年十一月廿  
七日の、上落合の静怡寮の一室での「臨終」  
には、辻潤氏は誰人をも「死の床」へは、呼  
ぶはしなかつたのであつた。へ誰れにも知ら  
さずに死なたのは、「自殺」したと言へるで  
あらうけれども、また反面から思へば「一切  
を無視」してゐたとも言へるのではなからう  
か。

その頃自分は、新宿のカミヤウイスキーで「ウイスキー」を専門に呑んでゐた。十五才の春の病患が、自分をして結核病者たらしめた。その以後に於ける自分の「病態」は、萬人が謳歌し享有するところの「青春」をま、めぐりまわつては来ないのであつた。青春を享樂するを知らなかつた自分も、「東京の空」にB29が出現する頃になつて、カミヤウイスキーで入りの女将を知つた。「恋愛の華」が、はつと咲きかけたが、昭和二十二年二月十二日の朝、自分が喀血して病床に倒れたのが直接的原因となり、そのままにいゝ死んでしまつたのであつた。

その時——醫者の診察を受けず、血止劑と胃腸藥を服用して、絶對安靜にしてゐた自分には、松出巖王兄、菅野青顔氏等から「過瀾死」

と（魂の家郷）であつた。

近世は、「文學」に対する信條とて云ふもののが、若し自分に於けるとすれば「自分」と云ふところの人間の姿を出来るだけ正直に表現すると云ふ以外には別に考へやうがないのである。と、「鳥有叢書の序」の中で述べられてゐるが、自分の「作文精神」もまた、その表現方法がどうあらうとて、「自分」といふ二足獸をむき出した顔の上に「表現する以外のなにものでもないのである。

辻潤は死んだが、自分はまだ生きてゐた。  
 だから、辻潤氏の三回忌に際して、このパン  
 フレット「水島流石の覚え書」を、「辻潤供  
 養」のために、現代日本の「地獄社会」にあ  
 くるのである。しかし、これだけのことでしか  
 出来まいと云ふことは、實には不十分なのであ  
 る。

だが、「どこでどんな国を死に方をするか  
みからなすが、葬式も墓も坊さんのお経もな  
んに主はいらな。しかし、自分がいにな  
にからと云つても、後の人達はなにをするに  
ちかひないが、なるべく簡単にやつて酒でも  
勝手に呑んで去らへばそれだけでいじと、は潤  
氏は「水島流吉の覚え書」の中で言つてある  
から、これを「肴」にして、一パイ呑んで費  
へれば、自分は有難いのである。

昭和二十一年十一月十二月

未完

# 鳥有叢書の序

或はアポロギヤ

つん 匠

西山君が僕の書き散らした零細な文章を、を集めて本にしたいと云ふ話を去年の夏頃から折々会ふたに持ち出した。私はその度にいつでもいい加減な返事をして置いた。なぜならあまり気乗りがしなかつたからであつた。つまりわざと單行して出版する程の文章を自分が書いてゐると思はなかつたからである。私は度々精神病院や、留置場の御厄介になつた人間である。病院を出る時には酒と執筆とを當分控へるやうにと云ふ御忠告を受けた。私はその御忠告にしたがつて、友人知己の間をわたり歩いてブラブラして暮らしてゐた。病氣にならないう以前からでも、私は自分の仕事に對して

別段自信を持つてゐたわけではなかつた。だから、病人になつてからは愈々自分に對して自信がなくなつてしまつた。さうして、今迄書いたものも云々といふ考へてみては思はれた。しかし、いくら考へてみては自分にはほかにやつてみようといふ仕事もなく、出来さうな仕事もないから、自信のあるなしに拘らず、またつから、つづらないうちに拘らず、生きてゐる以上物を書くよりほかに仕方ないと諦めてペンをとつて紙に向ふのだが、こんな書いでもみようといふことがなんにもなくなつてしまつたやうな気がしてさつぱりペンが動かないのである。自分がブラブラして遊んでゐても食へ

る身分なら別段問題は無いのだが、さうでないから困るのである。いくら親切な友人が澤山ゐても、さういふままで友人に厄介をかけるゐるわけにもいかないから、なんとかして自分で働いて食ふたいと思ふのだが、中々自分の頭が思ふやうには動かないのだから仕方がない。一度調子の狂つた頭は中々元通りにはならないのかもしれない。元通りになつたところでもたかが知れてゐるのである。自分は今更、自分の才能の貧弱な事や、境遇に恵まれなかつたことなどを悔んだところから始められないのである。寧ろ、自分のやうになつたらぬ人間でも数冊の書物を通じて送り、少數の愛讀者を持つことの出来たことを感謝してしまふべきだと考へてゐる。

西山君は私の友人でもあり、また愛讀者のひとりでもある。だから、私のつまらぬ文章を熱心に集めて出版してくれろといふのである。しかし、西山君は専門の出版屋でもなく、巨萬の富を握つてゐる資本家でもなく、單に一鉄工場の事務員に過ぎない。西山君が多年汗水を絞つて蓄へた私財を投じて出版してくれろといふのである。自分としてはまったく感謝の辞を知らない。願くは損をさせたくないといふのが、私の唯一の念願である。

「文藝」に對する信條とでも云ふものが、若し自分にあるとすれば「自分」と云ふ云々の人間の姿を出来るだけ正直に表現すると云ふ以外には別に考へやうがないのである。一切の生命は時々刻々に變化してゐる。「自分」と云ふ一個の生命も自然の法則に従つて絶えず變化してゐる。若し後世の人が私と云ふ人間に多少の関心を持つて私を批判してくれろとすれば私の書いたものを全部讀んだ上でやつてもらふたいと思つてゐる。

外界の自然の影響をたへか受けてゐる私は今迄にさいふと色々な人達の影響を受けてゐる。自分はあまり單純な人間ではないと思つてゐる。勿論、矛盾した思想や感情を澤山に持ち合せてゐる。私はそれ等の一切を自分の姿だと感じてゐるのだ。

私は年齢から云ふと老人の部類に入られゐるが、自分は少年のやうな氣持や、青年のやうな氣持を多分に持つてゐると考へてゐる。恐らく死ぬまでさうではなかつかと思つてゐる。これはすべての詩人や藝術家の通有性だと思ふ。……

昭和十五年 四月二十日

水島流吉の覚え書

—或は「未去白雲抄」—

×年×月×日  
自分の死ぬ日も今日と別段少しも変り  
はないにちがひない。お天気か、雨が降  
つてゐるか、風が吹いてゐるか、雪が降  
つてゐるか、と云ふ位な相違しかあるま  
い。もつとも近頃の状態で花の咲く日  
に爆弾が落ちてくると云ふやうなことが  
あるかも知れない。それには運わるくも知  
つて死ぬと云ふやうなことになるかも知  
れない。いづれにしろ死ぬ時は死ぬのだ。  
唯だなるべく苦痛なしに死にたいものだ。  
私は一度ならず死にかけた事があるが、  
塩原の山で雪の中で倒れてそのまゝ人事  
不省になつたが、気がついた時には夢か  
ら醒めたやうな気がして、甦る時がわか  
らないやうに、氣絶した時の記憶はなく、  
つまりそのまゝ往生してゐたら、苦痛な  
しに死ぬことが出来たわけだ。しかし、

わざ／＼凍死する了。簡はない。ただ凍死  
は楽だと云ふ體驗を得ただけだ。自分は  
死ぬ前になにか書き残して置きたいやう  
な氣持が度々するので、暇をみてきてる  
に書きかゝると考へると、色々書き残  
して置きたいことがあるやうな氣がする  
ばかりで、さう、特別に是非書き残して  
置かなければならぬと云ふやうなことは  
実はなんにもありはしないのだ。  
今からがと二十五六年前に私は無法  
庵の細々状をもつて飯山へ登った。宿院  
の一室に落ちついて、先づ私が最初に書  
き始めたのは二人の子供に宛てた遺書で  
ある。別段自殺する氣でもなんでもな  
かつたが、氣持がひどく感傷的になつて  
ゐたため、そんな風なものを書き始め  
たのだが、勿論四五枚書きかけてやめて  
しまつた。  
自分のやうな無益な人間を今生生かして  
置いてくれた多くの親切な友人達に対  
する感謝とか、財産へか、若しかりに少  
しでもあればの處分とか、遺稿へ若し  
そんな物があればの整理とか、云ふや  
うなことでも簡單に書きつければ遺書は  
それだけで済んだと云ふやうな氣がする。  
いゝで、どんな風な死に方をするかから  
ないが、葬式も墓も坊さんのお経もなん  
にも私はいらぬ。しかし、自分がいら

ないからと云つても、後の人達はなにか  
するにちがひないが、なるべく簡單にや  
つて過でも勝ちに各々でもらへばそれで  
いい。  
なにも書くことがないから、題名を  
きめて書いてみようと思ふ氣にならぬ。  
かりに「未去白雲抄」とつけたいが、  
白雲と云ふのは頭の中、若しくは心だ。  
未する妄想だと思つても、うへは白  
雲ではなく、暗雲か、黒雲か、とにかく  
こちらでもかまはない。かりに白雲と云  
つて置くだけだ。  
澤庵和尚は死ぬ前に「夢」と云ふ字を  
書いて死ぬだといふ説だが、いゝを澤庵  
和尚がなにかをひつぱり出したかと思ふ  
私は今澤庵和尚の開山だと云はれる大和  
の柳生村のお寺にゐるからだ。澤庵  
が「夢」と書いたからと云つて、別に不  
思議でもなんでもない。私も死ぬまへに  
「夢」と書いて死ぬでもない。いゝと考へて  
ゐる。澤庵の眞似をしたと云はれてもかま  
はない。澤庵がどの位あるエライ坊さんだ  
つたか、私にはわからぬが、書いた物  
をよんでみての自分の想像では、いゝく  
識の發達した坊さんだつたことだけは肯  
の。澤庵遺書を發明したただけでも澤庵  
に關する理由はたしかにある。生理や藥物  
に關する智識も相當にあつたらしく、

世の術を立派に心懸けてゐた中々エ又  
坊さんだつたと思ふ。  
「夢」と書いたのはたしかに實感だつ  
たにちがひなく、死にとまないと云つた  
のも別段過激でもなかつたにちがひない。  
なにしろ澤庵さんとしてはイヤミのない  
人だつたらしい。亭に引合に出してはど  
うかと思ふが、南天棒の「無門関の提唱」  
と云ふ本を覗いたが、まづたくこれには降  
参した。澤庵の悪癖を思ふ存分サラケ  
出してゐる。まづたくひとりよがりでない  
に云つてゐるのかサツパリわからぬ。  
多分豪放と云ふ形容詞のつく坊さんだつ  
たにちがひない。  
人物に會つたら案外無邪氣な俗物だつ  
たかも知れないが、澤庵そのものを誤解  
させるのはたしかにこんな風な坊さんの  
あるためだと思ふ。  
私も時々野狐禪だなどと云はれる。し  
かし、私はまだ一度も眞面目に参禪した  
ことはない。唯だ若干の禪に關する書物を文學  
としてよんだと云ふに過ぎない。  
×  
生きてゐることは不思議だ。——とにか  
く一切がわけもわからず唯だ不思議だ。  
—若し少しも不思議な事はなないかと云  
ふ人間がゐたら、それこそ最も不思議な

昔、華嚴の瀧に飛ぶこんで死んだ青年哲學者？ は萬有の真相は不可解だ、だから自分はこの恨みを抱いて死ぬのだと遺言した。当時、その青年の自殺の原因に就て色々と臆測を逞くした人達がゐて、失態の結果だとか、精神異状だとかさまざまな風評があつた。

「不可解」だから死なへらればならな  
いと云ふことになつたら、たいていの人間はみんな自殺しなければならぬことになる。自分も亦「不可解」の仲間の一としてある。しかしこの世には始めからそんなことを真剣に考へたり、問題にして頭を悩ましたりしない人間もなかりあるらしい。それに多少とも生活に餘裕のある人間で、もなければそんなことに頭を悩ましてゐる上ではあるまい。

生きてゐることになんの疑問もなく、自分の與へられた職業に従事し、至極満足して死ぬまで生きてゐられたらそれにこしたことはない。生きてゐる間ですべて、なにがなんだからよくわからぬのだから、泥んや死んでから先のことなどのがかる道理はない。醉生夢死と云ふ言葉は多分に輕蔑した意味に用ゐられてゐるやうだが、わからぬことはわからぬにと正直に云つた方がいいと思ふ。例の

りだかに讀んでしきりに感心してゐる。文學に對する不感慥もこれは名文章だと云ふ感に打たれてゐる。蜀山が感心したのは無理はないと思ふ。現代でこれに比敵する文章を書く人は先づ荷塵を除いては他にあるまい。また私は昔よんだナタニエル ホクソンの「*It is a pity that*」を讀んだときを憶ひ出した。

偶々熟睡した翌朝はまつたく前の晩とはすつかりかわつた氣持になることがあつた。こんなことがなければとてまかりきれたものではなない。冬の夜二度も三度も小便に起きて、曉方までねむれない時などは酒が呑めなくなつたのがつくづく身に沁みてゐた。一さらでも老の身のくるしき霜夜凍ゆる夜をすから、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきと心ひはん師走の月を、あかぬ顔に詠めて、折リく通不寒さは、御衣を脱せ給ひけを有難き御衣に去、是迄の事は思しも寄らざるべし。あはれ今宵も風騒がし、幾度も行交ぬせんと、寢よとの鐘に寢所調へて、例の縁端に先づ立出でたるに、簾所に毛夜なべの身仕舞にや戸のがら／＼と鳴る音のしに取ば一道はかうぞ思ひつきける。死がまに念佛申まぬ人はあれど、あがまに小便せぬ人ぞなきし。——これは世有の「一徳難し」といふ小

知らざるを知らざるとなすこれ知る也  
一と云ふのは名言だと思ふ。自分は醒生  
夢死で結構だと考へてゐる。人生夢の如  
し——とはだが一番始めに云ふ出した  
の不知らないが、あまり度々繰り返して  
おはれるのでたいへい無意識に用ゐられ  
てゐる言葉だが、醒めない間は夢は死ん  
ど現実とかはりはない。自分は気が狂つ  
た時、現実の世界が一切顛倒してゐるや  
うな錯覺を起したことが、莊子の蝴蝶の比喩  
から云へばどうぢがほんとうなのだから  
かつたものではない。釋迦の眼に映じた  
人間はみなたいてい「顛倒の衆生」だつ  
たのである。

佛教の經典に現はれてゐる釋迦の説法  
が、どこまでほんとうに釋迦の説だかと  
云ふことは古來から屢々問題になつて大  
乗は非佛説だとか、でないとか色々とい  
ふやうな議論もあるやうだが、經典に現は  
れてゐる以外には別段その眞偽を質しや  
うがないから、その經典をよむ各人の頭  
の程度次第で解釋するより仕方がないこ  
とだと思ふ。

今朝は春雨のやうな雨が降つて、阿呆  
鳥が鳴いてゐる。どうやら冬も峠を越し  
たやうだ。しかし、梅はまだ咲かず、鶯  
の聲もきこえない。世有の鶉衣を何年ぶ

士

文章の末尾だが、こんな固な文章に興味をかき立てる自分の老筆はごまかしやうが  
たし。

こゝなつまらん事を書き散らしてな  
にたるか、と思ふと書く氣がしなく  
なる。まづたく怪しく物狂ましく  
なると兼好は云つてゐるが、書か  
なりでも自分はいつでも怪しく  
物狂ましい人間だと考へてゐる。

永嘉大師の證道歌はかなり昔から自分  
が度々愛誦してゐる散文詩である。一不  
降妄想 不求真しと、云々文句を金科玉  
條の如く心得てゐる。この句を憶ひ出す  
と、なにを書いてまじいと言ふ氣がして  
来る。

山寺の和尚さん、猫をカン袋に押し込  
んで向ふ通るは逢着ずやなれ、瓜や茄  
子の荒ざり、可愛けりやこそ神田から  
通ふ、姉は十六妹ははたす、三つちが  
の兄さんと、呼ぶとこたへぬ山ほとゝぎ  
す、梅は咲いたが櫻はまだな、坊や  
は、子だぬん抱しな、文福繁釜に毛が  
生へた、ぬいて毛刈つてまた生へた。  
雨の降る日はよきかな、一本の古縄と  
をりて摸はれば人に踏まるゝこともあり  
雨の降る日はよきかな。かな、かな  
て夕日の落するころ、野路の村雨齊やう  
ず、目出たメデタの若松様よ、ふようた

んボツワリコ、半端コロ／＼、ころばぬ  
先に、山路きまなやうにやうみ草草、  
！これは自分の頭の聯想作用をほんの少  
しばかり示したばかりで、人間のネズト  
論理的かもしれない。天狗俳諧はこれより  
セス、これは文章で、あれを讀んで解ったと  
かへした文章で、あれを讀んで解ったと  
云ふ人はシェンペングラアの「西洋の没落」  
と云ふ本をよんでわかつた云ふ人と同じ  
類である。ルイス・キャロルの「ワン  
ダランド」、ラブレイの「ガルガンチュ  
ア」——いくらでもある。

山寺や炬燵かへてゐるねかな  
新聞モラヂオも聴かぬ籠り  
松籟幽玄松籟の音ばかり  
玄米を嚙みしめて感涙にむせびけり  
こんなならだれにもあかる。

春雨やオヤあや雪や梅の花  
これは縁雨の句である。縁雨もそう少  
し遅く生れたら、あんなくだらなはこと  
を骨を折つて書かずにすんだと思ふ。奇  
才時に遇はず徒らに彫心鏤骨の文章を殘  
したか、まつたく惜しい気がする。

どうせん人間が脱線してゐるのだから、  
思ひきつて脱線したやうな——つまり奇  
想天外——なんとも、他にウマイ形容詞

慈雲堂と云ふ圓頓病院にゐた時、私は  
毎朝飯前に南無妙法蓮華經の太鼓を叩い  
たり、自我偈をやらせられたが、「法華  
經」のありがた味は「普門品」を除いて  
はあまり感ぜられな。この寺に來てか  
らも、讀む物がな。のうやたらにお経は  
かりよみ散らした。どうもさうばかり面  
白くない。あまりありがたすぎるので面  
白くないのか、お水なり。すべて「真理」  
と云ふものは米のメシの味みたいなもの  
なまし水なり。

諸行は無常で一切は空であり、この世  
はいつでも火宅無常だ。それが現代では  
特に著しく人間の眼に映じてゐると云ふ  
だけだ。いかに如減に彌勒菩薩が現出して  
まよさうな時だと思ふ。——自分が佛  
教の信者なら、こんな圓にきへるかも知  
れな。いぶ、あひにくれはダイストだと  
云ふことになつてゐる。變現自在矛盾の  
妖怪である。一敵國降伏の呪文を十萬  
遍となへて摩利支尊天に祈願をこめたと  
ころで別段怪しむにたりない。  
いづれの行も及ぶがたき身であれば、  
とて土地獄は一定住家である——と親鸞  
は正道に告白してゐる。しかし、また一  
方では一心は淨土にすみ遊ぶしと云つた

はなはものか——なにとて書ききたはと  
思ふが、しづらく酒にありつかないの  
空想力がよく貧弱になつて、いやに常  
識的な力のみみたになものしからず、未  
だ、奇想天外だとか、嚴肅莊重だとか、絢  
爛優美だとか、爛漫だとか、婉婉だとか、  
漢語の形容詞はまつたくくさる程ある。  
雪の形容詞に「白皚々」と云ふのがある  
が、がい／＼など云ふ音から雪のかん  
い／＼など風にかん／＼から水のか自分の  
やうな不感症にはほとんど解しかねる。續  
紛と云ふならまだしも雪の降るかんじが  
する。

一切の文學は人間の妄想以外のなに  
のものであるまい。やたらに手数をかけた  
人間の饒舌以外のなにのものであるまい。  
しかし、生きてゐる以上、人間はなに  
しらしやべり散らかさなひでは退屈して  
しまふ。自分も暇さへあると云ふな、ま  
らな。本でもよんでしまふ。しかし、讀  
んだ後でよくもこんなつまらぬことを長  
長と頭を絞つて書いたものだと感心する  
する以外には到存感心できない。だが、  
文章を書くこととはどんなつまらぬ  
ことを書くにしても決して樂な仕事では  
ない。

リ、「遊煩惱林現神通」などとも云つて  
ゐる。どちらを本當であつたか云々  
い、偶々、自然の美しさを感じた時には自  
分も亦がすかき信仰に似たものを感得す  
ることが出るが……  
空念坊が突如として現はれた。  
——御勉強ですか？  
——暇潰しのいたずら書きさ、  
——なにが面白ひことでも書けますか

な  
——頭の中に溜つてゐる滓をはき出し  
てゐるところだ。みんをハキ出せたら、  
さぞせ／＼して氣持がいいだらうと思  
ふ。  
——私などはいつとも無念無想で、頭の  
中がカラッポなのでせ／＼しすぎてゐ  
る位です。  
——羨やましは詰だ。僕はただこんな  
カスをはき出すことによつて、自分と云  
ふ人間の馬鹿々々々を改めて痛感するこ  
とが、せめてもの安心なのだ。ただ愚か  
な人間の愚痴を並べてゐると云ふだけだ。  
——なまあみだぶつ／＼

×年×月×日  
自分のやうな人間は植物で云へば雜草  
のやうなもので、蟲で云へばバイ菌のや





を一冊も満足に読んだことはない。ユニ  
オンの第四讀本は私に基督教的情操を涵  
養させた。基督教は自分に形而上學的な  
欲求を促した。同時に社会主義的な道  
徳精神を助長せしめた。こんな風な聯想  
はかぎりがないからやめる。書くといふ  
はまづと詳細に書きなけねばならぬ。  
日本の古典——古典といふのは実は單  
に昔の本と云ふ位な意味だと思つてま  
らへばいい——で繰り返してよんだのは  
「徒然草」位なものだ。あとは殆んど  
知らないと云つていい。日本の古典に  
限らず、西洋の古典でも——例へばホ  
マアとか、ダンテとか、ニベリンゲン  
だとか——私には讀んでたいては興味を  
覺えない。つまり原語に對する智識がな  
いからだと思ふ。それに生活感情の距離  
が甚だしく、浪花節に興味を持つ人間が  
べストベンとかバツハの音楽をきかま  
ねてゐるやうなもので、まったく馬の耳  
に念佛のやうなものだ。  
最近「徒然草」を通讀したが、勿論青  
年時代にかんじたやうな興味は起るわけ  
はない。アミエルの日記などは西洋の「徒  
然草」のやうなものだが、比較にならな  
い。復讐の心理的解剖を試みられてゐる。  
パロニの自叙傳はいくたびか繰り返して  
讀んで面白かつた。

### 癡人の獨語

非凡間の人名辭典によると、私は昭和  
四年だかに、どこかで浮浪中に死んだと  
云ふことになつてゐるさうだ。これはか  
まり前に「無風帶」の西山勇太郎君から  
聞いた話だが、私が名古屋で氣が衰にな  
つて病院に入れられてゐる時に、新聞に  
も死んだやうに出たことがあると云ふか  
ら、恐らく、その新聞を讀んだら、その  
人名辭典を見たりした人達は私が亡者に  
なつてしまつたと思つてゐるにちがひな  
い。それに私はかなりながい間文章らし  
いものをいかに發表したことがない。  
文章を書かない文士へ私は自分では文士  
だと思つてゐるが、他に能かないの  
で文章を書いて生活して来たまでの話で  
ある。は亡者も同然で、全く生き埋めに  
なつてゐるやうなかんじを度々させられ  
てゐる。それに私は病氣をしてから自分

私は自分の書いてゐる文章がさうく聯  
絡がなく、バラバラで意味も充分ハッキリ  
しないことに気がつてゐるが、夢の  
状態だといふやうなものであらへばいい。現  
分は漠然と夢をみてゐる人間の書いたものだ。現  
實的だと稱してゐる人間の書いたものは  
「それなり」であること、たいていは  
「それなり」で、たゞごとく以外のなにもの  
でもない気がする。自分は自分の妄想の  
去末を書きしるすばかりである。無差別  
であり無分別だと云ふことを分別してゐ  
るだけだ。

「書物展望」昭和十八年  
八月九月號所載

の頭を信用しなくなつてしまつた。つま  
りさうく自信を失つてしまつたのだ。だ  
から尺八を吹いて乞食したり、ヘタ巻  
な字を賣りつけたり、幸ひ親切な友人が  
澤山ゐるので、それ等の人達の喜捨を受  
けたりして、やつとどうやら息をつない  
でゐると云ふやうな状態なので、全く時  
節柄甚だ面目次第のない話だと考へてゐ  
るのだが、そのうちなんと云ふやうな事  
が回復して「文章執筆」と云ふやうな事  
が出来ればいいと考へてゐるのである。  
それに私はどう云ふものかへ多分頭の調  
子も狂つてゐるためだらう。「文學」と  
云ふものに対していつの間にかさうく不  
感症になつてしまつたことだ。一例を舉  
げると、どんなのがほんとの名文章なの  
だか、ほんとに見当がつかなくなつたのだ。  
それにハガキを一枚書くにしろ、しまつ  
ても、二三行書いて書けなくなつてしま  
つたり、つまり拙漢字を度忘れしたりし  
て、なんともなく早發性痴呆に愈々なつた  
のではなからうと思つたりするのである。  
けれど本を讀むとたいてい意味がわかる  
ので（尤も本によるが）まだ大丈夫だと思  
つたりすると云ふ始末なのである。  
先日、久しぶりでこの雜誌「書物展望」  
の編輯者S氏を尋ねたら、偶にはなにか